定期的にヌいてあげないといけない奇病の弟くんはお姉ちゃんの通う学園でいつでもどこでもヌキヌキされる

あなルン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界樹、魔法使い。異常を異常と思わないように張られた認識阻害の結界。様々な要因が複雑に絡み合う麻帆良学園に、射精するまで勃起が収まらないショタ（のどかの弟）がいたら……というＩｆのお話。

目次

プロローグ（宮崎のどか　フェラ）―― 1
その後（宮崎のどか　本番）―― 4
内緒のお願い（パル　パイズリ、喉フェラ）―― 9
迷子（見習いシスター　フェラ、セックス）―― 13
迷子2（相坂さよ　茶々丸　アナルセックス）―― 18
迷子3（月詠　中出しセックス）―― 23
x（夕映　素股）―― 28
発情期（桜咲刹那　中出しセックス）―― 33
授業中に勃ったら（雪ちゃん　フェラ　アナル）―― 37
噂の魔法少女（愛衣　受精）―― 40
相性よし（エヴァ　騎乗位　中出し）―― 44
看病（那波千鶴　正上位）―― 47
配信準備（桜子、美沙、釘宮　露出セックス）―― 50
魔法少女？（源しずな　パイズリ、セックス）―― 56

プロローグ（宮崎のどか　フェラ）

影でショタをつまみ食いしている女医の元に、エロゲーみたいな少年が姉に連れられてやってきた。ズボンの上からでも分かる程勃起した巨根から女医は目が離せない。

「あ、あの、弟のおちんちんが、その……！」

「宮崎さん。落ち着いて。大丈夫。言わなくてもだいたい分かるから」

「は、はぅ～」

姉、宮崎のどか。

弟、宮崎ほのか。

あまりの女の子っぽさに妹の間違いでは、と一瞬思った女医だったが、股間で主張している雄のシンボルが男であることを証明している。

少年の陰茎は大人顔負けの大きさを誇り、かれこれ１０分近く勃起し続けている。

この年で露出して興奮する変態というわけでもなさそうだが……姉、のどかの話によるとここにくる1時間前から勃起しっぱなしだそうなので明らかに異常だ。バイアグラを誤飲したとしても、こうはならないだろう。

女医は医療辞典を開き、勃起について調べる。

（あら……）

意外なことに勃起が収まらない事例は過去にもあったらしい。

対処法もいくつか記載されているが、女医は一番エロ……性的な方法を試してみることにした。

（役得、役得♪）

女医は少年をベッドに横たえ、ズボンとパンツを脱がす。

「宮崎さん。よく見ていてね。もし、また勃起したらお家であなたがしてあげるの」

「え……えー?!」

「ここは病院よ。静かにね」

「はいい、すみません」
「それじゃ……ほのかくん。痛かったら言ってね」
「はい……あっ」
　何人ものショタを手で射精させてきた女医による手コキが始まる。
（わぁ……ほのか、気持ちよさそう……）
「宮崎さん。ちょっとやってみましょうか」
「えっ……は、はいっ」
　治療行為という建前で、姉に実の弟を手淫させる女医。
「いたっ」
「あ……ご、ごめんね」
「んー……手だとまだ刺激が強すぎるのかしら。歯が当たらないようにすればお口で……いえ、ごめんなさい。私がやるわね」
「いえ、や、やってみます！」
　あわあわしているのどかが面白くて、女医はつい悪乗りをする。
「あー……む……じゅる……じゅず……じゅるる……ぷは……ど、どう？　ほのか。気持ちいい？」
「うん……お姉ちゃんの口……柔らかくて、あったかくて……すごく気持ちいい……」
「そ、そっか……えへへー……それじゃあ、続きするね……はむ……れろ、れろ……じゅる……じゅずず……」
「……はぁ、はぁ……あっ」
「ちょっとごめんなさいね」
「ぷはっ」
　少年がそろそろ射精しそうだと感じた女医はのどかの肩を引いた。
　ちゅぽん、とのどかの口から陰茎が抜けたところでビーカーを当てる。
「んあああっ」
　ドビュ！　ビュル、ビュルルル！
「わっ、わっ」
　ピンク色の亀頭から、ビーカーにビュービューと大量の精液が吐き出される。

ビュル、ビュルル、ビュッ、ビュ、ビュッ……ピュル。
「はぁー……はぁー……」
「すごい……いっぱいになっちゃった」
（本当にすごい量……匂いも濃い……んっ）
口の中に涎が溢れ、ごくりと喉を鳴らす。
（が、我慢よ。さすがに実の姉の前で本番はできないわ……）
子宮が疼くのをこらえながら、女医はビーカーに蓋をし、診察の続きをする。
「宮崎さん。ほのかくんの症状はとても珍しいの。経過を観察しながら治療する必要があります」
「そうなんですか？」
「ええ。私の方でも色々調べてみるけど、宮崎さんはほのかくんが勃起したらなるべく早く今みたいに対処してあげて下さい。一応、効果はあるようなので」
「え……あ、本当だ」
ベッドの方に振り返ると、ほのかのおちんちんは力を失っていた。
萎えても勃起した並みの男性ほどのサイズはあるが。
「あ、あの……お薬とかで治りませんか？」
ほのかが遠慮がちにそう切り出すと、のどかは優しく微笑みかける。
「お姉ちゃんに気を使わなくていいんだよ。これは治療なんだから。大丈夫。おっきくなったら、またお姉ちゃんがぺろぺろしてあげるからね」
「う、うんー」
（尊い……）
自分のように色欲からではない、慈愛の表情を浮かべるのどかに女医はお姉ちゃんボテ腹エンドがいいか、それともピルを処方したいつでも安全中出しルートがいいか悶々としだすのだった。

その後（宮崎のどか　本番）

「ご、ごめんね。お姉ちゃん」
「あれは仕方ないよー」
帰りの電車。
ほのかにとっては運が悪いことに女子生徒の部活帰りとかち合ってしまった。
ほのか（見た目ズボン女子）以外女の子しかいない車両。
「あついねー」
「ねー」
周りにいる女子生徒のほとんどがスカートをパタパタさせ始める。
健康的な白い太ももや色取り取りのパンツを見せつけられたほのかはあえなく勃起。
個室トイレでのどかに鎮めてもらうことになった。
「なかなか出ないね……」
電車は揺れる。
その度に歯が当たったり喉奥を突いたりしてしまった。
今はのどかに支えられて立ち、手でしてもらっている。
「あ、そうだ。お姉ちゃんのおっぱい触っていいよ」
「あ、ありがとう」
「ふふふ。おっぱい好きだもんね」
「あうー」
シャツのボタンを外し、ブラもずらすのどか。
「わぁ……やわらかい」
張りのある乳房を優しく揉むと心地いい弾力が返ってくる。
乳首は少し硬くなっていて、上向きに尖りつつあった。
ガッタン。
「あん♡」
電車が大きく揺れた。
バランスを崩したほのかはよろめいてしまい、乳首を口に含んでしまう。

「いいよ。そのままチュウチュウして……お姉ちゃんのおっぱい吸いながらしーしーしようね……しこしこ、しこしこ……あっ♡」
優しく囁かれながらの手コキ。
「ふぁ」
「我慢しないで♡　お姉ちゃんの手の中で、いっぱいびゅーびゅーしようね♡」
便器に向かって射精をするほのか。
射精が終わると、のどかは弟の頭をポンポンと撫でる。
「がんばったね♡　えらいえらい♡」
『○○～、○○～』
「あ、丁度いいから残ってるの吸っちゃうね……はむ……ちゅっちゅ、ちゅるる……」
のどかはしゃがみ、弟のおちんちんを綺麗に掃除し始めた。
舌の柔らかさと温かさ、のどかの優しさが伝わってくる。
「くぽ、くぽ……んっ、んっ……ぷは……はい。綺麗になったよ」
「あ、ありがとう、お姉ちゃん」
「どういたしまして。さ、戻ろっか」
「ちょ、お姉ちゃん！」
「え？　……あ」
ほのかが指をさして注意する。胸の部分が開いたままで、小ぶりな乳房が丸見えになっていた。

・
・
・

夜８時。
ほのかが自室で漫画を読んでいると、壁の向こうから声が聞こえてきた。
「あっ……あっ……」
（これって……）
壁の向こうで、のどかがオナニーをしている。

そう思っただけで、おちんちんがムクムクと勃起してしまった。
「あっあっあっ……すごいよぉ……固くておっきいのが入ってくる……あっ、あっ……」
（お姉ちゃん、お姉ちゃん……）
昼間の姉の痴態を思い出しながら、ほのかはおちんちんを擦る。
「あんっ、あっ、あんっ……」
のどかの喘ぎ声もだんだん大きくなり、クチュクチュ、クチュクチュという音もかすかに聞こえてきた。
「んー！　……」
急に静かになった。
絶頂したのかな、と思っていると、
コンコン。
「ほのか、開けて？」
「う、あ、うんっ。すぐ開けるねっ」
慌ててドアを開けると、ほんのり顔が赤くなったのどかが立っていた。
「一緒にお風呂入ろっか。お風呂なら流すのも簡単だし」
「う、うん」
お風呂に入るとさっそく勃起していることがバレた。
「わ。もうおっきくなってたの？　我慢しないですぐ言ってね？」
「う、うん」
「ぺろぺろしてあげるから、そこに座って」
浴槽の縁に座ると、のどかがシャワーをかける。
まずボディソープで洗い、その後に咥えてくれた。
「ぺろぺろ……ちゅ、ちゅ♡」
亀頭の先をくるくると舐めたかと思うと、先っぽにキスを落としてきた。
「ふー……んっ……ちゅぽちゅぽ……んんっ……じゅず、じゅずず……」
おちんちんを咥えて、前後に頭を動かす。
のどかの裸をじっと見下ろしていたほのかは、のどかの手が割れ目

を弄っていることに気が付いた。
「お姉ちゃん」
「ふ？　はーひ？」
「僕もお姉ちゃん気持ちよくしたい」
「え……えー!?　い、いいよお姉ちゃんは！」
「でも、いつも僕ばっかりだし……」
「うーん……ほのかは、お姉ちゃんのこと好き？」
「大好き！」
「お姉ちゃんもだよー。でもー……んー……うん」
「？」
　のどかは床に寝転んだ。
「あ、ちょっと冷たい……シャワーを流して……はい。お姉ちゃんのここにおいで♡」
「お姉ちゃんっ」
　脚を開いて、のどかは割れ目を指で広げて見せた。
　小学校で性教育を受けたばかりのほのかは、おちんちんを握りしめて、姉の割れ目に先っぽを押し付ける。
「あれ……あれ？」
　だが滑ってしまい、なかなか入らない。
　見かねたのどかは竿を優しく握り、入り口に誘導してあげた。
「ここだよ。そのままゆっくり腰を前に出して……んっ」
　姉に竿を握られながら、言われるままにゆっくり腰を進めると、亀頭が熱い感触に包まれズブズブと膣の中へ入っていった。途中、プチ、という感触がしたが、のどかも特に反応しなかったのでそのまま奥へ腰を押し進める。
　コツン。
　亀頭が子宮口にまで咥えこまれた。
　のどかの綺麗な白い下腹部は、心なしか弟のペニスの形に膨らんでいるようだった。
「お姉ちゃん、大丈夫？」
「うん。なんだかお腹の奥がジーンてするだけで、そんなに痛くない

みたい。ゆっくり動いてみて？」
「うん……」
ニチュ……。
腰を引くと、吸い付くような締め付けを感じる。
ずぷぷぷぷ……。
「ふあ♡」
「うぅ♡」
腰を突き出すと、何枚もの舌で舐められているような快感に襲われた。
ニチュチュ……ずぷぷ……にちゅちゅ……ずぷぷ……。
「はぁ♡　あんっ♡　あっ♡　ひう♡　はん♡」
ずっぷ、じゅっぷ、ずっぷ、じゅっぷ……パン、パン、パン……パン、パン……パン、パン、パン……。
「あっ♡　あっ♡　そ、それ♡　それスゴイよぉ♡　あああ♡」
「うう……お姉ちゃん、僕もう出そう」
「いいよ♡　お姉ちゃんの中で好きなだけお漏らししていいよ♡」
「あうっ」
２人はお互い抱きしめ合った。
ドビュ！　ビュル！　ビュー、ビュー……。
「んちゅ、ちゅっ、ぷは……んちゅ、ちゅ……」
弟の射精を受け止めながら、恋人にするようなキスをするのどか。
幼い姉弟は拙いながらも相手へ好意を伝えようとしてか、必死に舌を絡めあう。
「はぁ……はぁ……お姉ちゃんの中、気持ちよかった？」
「うん。凄かった」
「えへへ。そっか♡　……それじゃあ、またさせてあげるね」
「……！」
ほのかの表情がパーッと輝く。
（こ、今夜は眠れるかな……）
お腹の中でムクムクと大きくなっていくのを感じたのどかは、心の中で苦笑いを浮かべるのだった。

内緒のお願い（パル　パイズリ、喉フェラ）

「ん……♡」
早乙女ハルナは、パンティの中に手を伸ばした。
妄想するのは今度の本にするショタもののネタ。
くちゅ、くちゅ、くちゅ、くちゅ。
「ん♡　ん♡」
ピンポーン。
「……誰よこんな時間に……って、ヤッバ！　もう約束の時間？」
ドアを開けると案の定、原稿の助っ人に来てくれた綾瀬夕映とのどか、そして妹っぽい弟くんだった。
「パル。何か足りない物とかあるです？」
「え？　うーんと、そーね。あ！」
食材だの原稿に使う小物などつらつら挙げるハルナ。
「ちょちょちょ、落ち着くです。今メモするからもう一度お願いするです」
少し量が多く、夕映とのどかは2人で買い出しにいくことにした。
「あの、よろしくお願いします。何を手伝えばいいんですか？」
「ふむ……」
「……あの？」
ハルナは触覚をピコピコさせながら、ほのかを眺める。
・
・
・
「あ、あの……これで、いいですか？」
「ふおー！」
2人ツきりのハルナの部屋。
ほのかは夕映の制服を着せられ、恥ずかしい格好をさせられていた。
スカートを自分で捲り上げ、ピーンと立ち上がった股間を晒している。

「ふおおお！」
奇声を上げながら物凄い勢いでペンを走らせるハルナ。
書いては飛んでいく紙の様子がコピー機みたいだとほのかは思った。
「ふぃー……はい。ありがとう。それじゃあお待ちかねのご褒美タイムね」
ほくほく顔のハルナは、いそいそと制服の上着を脱ぎ始めた。
上半身薄いブルーのブラだけになると、風船のように大きな胸をむにゅ、と押しつぶす。
「クラスでこれができるのは私ー……以外にも何人かいるけど、ふつうは私だけなんだけどね?!　あのクラスはやっぱおかしいわー」
「……？」
「あぁ、ごめんごめん。のどかじゃ体験できないパイズリをしてあげるからね」
ベッドに腰掛けたほのかの股間に、よいしょ、と胸を置いた。
ハルナの胸は大きいが、胸の谷間からにょきり、とほのかのおちんちんが顔を出す。
「これ頑張れば咥えられるかな？　……お、届くじゃん！」
「はう」
涎を垂らし、ニチャニチャ音を立てながら揉むように動かすハルナ。
柔らかい餅に両側から挟まれるような感触が竿全体に広がる。
亀頭は耳年間な女子中学生の口の中。
残りは乳房の中に埋もれている。
その卑猥な見た目に、ほのかは頭がクラクラしてきた。
ニッチャ、ニッチャ、むにゅむにゅ、ニッチャ、ニッチャ、むにゅん、もにゅん……。
ぶるん、ぶるんと揺れる乳房。
左右から押されて形を変える乳房。
左右別々に上下に動いく乳房。
ほのかは口を開けたまま、ハルナの胸に釘付けになっていた。

「そんなに見つめられると、もっとサービスしたくなるなー。弟くん、おっぱい舐める？」
「（こくこく！）」
「ん♪　よしよし、素直でよろしい」
ハルナはブラジャーを外してほのかを抱き寄せる。
「ちゅう、ちゅう……れろれろ……ちゅう、ちゅう……」
「ん♡」
赤ん坊のように吸い付いたり、感じさせようと乳首を責めてきたりするほのか。
「それじゃあ、お姉さんはしこしこしてあげよーかな？　ローションを垂らしてー」
クッチュクッチュクッチュクッチュ！
ハルナの手コキは激しかった。
ローションのぬめりも手伝って、かなり強い快感がほのかを襲う。
「イキそうになったら教えてね。お姉さんが飲んであげるから」
「あ、あのっ、も、もうっ」
「え」
少年の切羽詰まった表情に思わず焦る。
ハルナは大急ぎで亀頭を咥える。
「んぶ?!」
「んあ！」
が、勢いがつきすぎて喉の奥まで飲み込んでしまった。
「んごっ、えぼっ」
「え？　ハルナさん、大丈夫ですか？」
「んぐ、ん、ら、らいじょ、ぶ……じゅぽ、じゅぽ……じゅぽっ、じゅぽっ、じゅぽっ……」
根元まで飲み込んだハルナは息苦しさに涙を浮かべていたが、亀頭に喉の奥にある性感帯を刺激され、今までにない快感を感じていた。
「あっ、あっ、あっ……で、でます！」
「〜〜〜♡」
喉を使ったフェラチオにペニス全体を刺激され、ほのかはあっとい

う間に射精した。
絶頂に何度も跳ねるペニスに喉奥を刺激され、ハルナも同時に絶頂に達する。
目に涙を溜めながらも、うっとりと恍惚の表情を浮かべるハルナ。
「ふー……ふー……ぷはぁっ……あ〟ー、すごかったー。弟くんのおちんちん、すんごくおいしかったよ♡」
口から溢れた精液がダラダラと垂れ、乳房を白く染め上げる。
ベッドの上に力無く垂れ下がったペニスだったが、ハルナの痴態を見ていると再びムクムクと鎌首をもたげていった。
「くす♡　どーぞ、お姉さんのお口まんこで好きなだけじゅぽじゅぽしていいよ♡」
「え、えいっ」
「おぼっ♡」
ハルナの髪を掴んで、ぐいと腰を突き出すほのか。
激しい方が喜ぶらしいと分かったので、遠慮なく腰を振る。
「んじゅっ、おっ♡　んぶ、んっ、え〟♡　じゅぽっ♡」
頭を抱えながら、激しく腰を振るほのか。
漫画なら目にハートマークが浮かぶ程感じているハルナは、ほのかをご主人様にして色々なプレイをしてもらう妄想を逆らせながら、ゆっくりと意識を手放していった。

迷子（見習いシスター　フェラ、セックス）

「え……ここどこだろ」
　何故か気が付いたらのどかと離れ離れになっていて、いつの間にかほのかは迷子になっていた。
　それが人避けの結界にせいだとは、ほのかにはまだ知る由もない。
　少しうろうろしていると教会らしき建物が見つかった。
「すみませーん。誰かいませんか？」
　返事はない。
「本当に誰もいないのかな……」
　誰かいて欲しい。
　そう思っていると、奥の方で物音がした。
「ほっ……良かった」
　物音がした方に行くと、椅子がたくさん置かれた広間だった。
「あれ……」
　クチュ、クチュ、クチュ……。
　微かにあそこを弄っているような音が聞こえる。
　それは告解を行う部屋からのようだった。
　片方の部屋は扉が閉まっている。
　ほのかは空いている部屋に入った。
　部屋は少し狭く、スライド式の小窓が付いていた。
「扉を閉めて下さい」
「ひゃ、ひゃいっ（び、びっくりした……）」
　それは少女の声だった。
「何かお悩みですか？　お話するだけでも心が軽くなりますよ」
「えっと……」
　内容が内容なので、悩んでしまう。
「安心してください。ここでのことは絶対に漏らしません」
「そうなんですか？　そ、それなら……」
　ほのかはゆっくりと、自分の病気のこと、姉に苦労をかけていることを話していった。

・
・　・　・

悩みを打ち明けると、少女は「微力ですが、お力になります」と告げてきた。

小窓が開かれ、なんだろうと見ていると、少女の唇が現れた。

褐色の肌に、ぷんと膨らんだ小さな唇。

「初めてですが、どうぞ。心を込めて精いっぱいご奉仕します」

あー、と唇が開かれる。

戸惑っていると、少女は誘うように舌を動かし始めた。

白い歯から覗くピンク色の舌は、見ているとのどかやハルナとの行為を思い出させる。

「……ごくっ」

ズボンを下げ、半勃ちになったおちんちんを少女の口先へ近づける。

もう少し、というところで少女は口を閉じてしまう。

「スン、スン……良い匂い……」

「え」

「あーむ……もむ、もむ……じゅぷ、じゅっぷ……」

先っぽを半分だけ咥えると、舌で鈴口を押したり吸ったりした。

「ん……くぷ……じゅぽ……ん……れろ……れろ……ん……じゅぽ……じゅぽ……」

亀頭をぱくりと咥えたり、裏筋を舐めると少女は竿を上下にしごきながら、亀頭を咥えて頭を前後に揺らし始めた。

「ん……くぽ、くぽ……じゅぽっ、じゅぽっ……」

涎が竿に垂れて、丁度いい潤滑材になる。

「ん……ん……じゅぽっ、じゅぽっ……ぷは……れろぉ……あなたのおちんちん、おいしい……おおきい……くぽ、くぽ……じゅるるっ……かたい……」

竿を少女のしなやかな指が上下に動く。

形の良い唇が亀頭を包み、前後に出し入れされる。

じゅぽ、じゅぽといやらしい音が告解室に響き続けるが、ほのかの耳には少女の囁きが、まるで耳元で囁かれているように感じる。
「じゅっぽ、じゅっぽ……ん……ふ……はぁ……ん……じゅっぽ、じゅっぽ、じゅっぽ……気持ち良い？　……じゅっぽ、じゅっぽ……れろ……はぁ……イキそう？　……くぽ、くぽ……じゅる、じゅずずっ……」
ちゅぽん、と音がした。
少女の顔が下がっていき、袋の裏からつー……と先の方まで舐め上げられる。
残念ながらペニスに隠れて顔はよく見えなかったが、かなりの美少女だと思った。
「ふぅん……はぷ、ちゅぷ、ちゅぷ……先っぽからお汁が洩れてきた……ちゅる、ちゅる……れろん」
亀頭が咥えられ、唇がはむはむと動く。
我慢汁を舐め取ると、少女は離れていった。
「……」
無言で差し出されたのは、ミニスカートに包まれた、小さな丸いお尻だった。
スカートを捲り上げると、白いパンティ……クロッチの部分が濡れている。
ほのかはパンティに指をかけ、ゆっくりと下ろした。
ツンと尖ったクリトリスと、涎を垂らす無毛の割れ目が現れた。
指で左右に広げると、愛液に濡れたサーモンピンクの秘肉が見える。
「……ごく」
亀頭を膣口に押し当てると、クチュ、と音がした。
少女の肉は柔らかく、少し抵抗されたが、亀頭がゆっくりと中に飲み込まれていく。
「ん……」
ほのかは亀頭が見えなくなった所で腰を止め、ゆっくりと引いた。
もう少しで抜ける、という寸前でまた押し込み、亀頭が包み込まれ

たら引き戻す。
じゅぷ……ちゅぽん……じゅぷぷ……にゅぷ……じゅぷぷ……。
「ん……ふぅ……ん……はぁ……♡」
だんだん少女の声にも艶が混じってきた。
「ふああ♡」
予告なく、一気に押し込んだ。
それだけで少女はガクガクと震え、膣が小刻みに締め付けてくる。
「はぁぁ……い、イっちゃった……♡」
お尻を突き出す格好のシスター。
まだ絶頂中なのか、ビクン、ビクンと腰が震えている。
「私ばかり……んっ……すみません……どうぞ、好きに……動いて」
若干不安だったが、少女の細い腰を掴んで本格的に動くことにした。
少女の狭く熱い膣肉を味わうように、ゆっくり、しかし遠慮せず腰を押し込む。
「あっ♡　やっ♡　だめ♡　それだめ♡　届いてる、赤ちゃんの部屋に届いてる♡」
腰を回しながら、ズルー……と抜ける寸前まで腰を引く。
「んあああ♡　あっ♡　ひゃ♡　はぁ♡」
それをだんだん速くしながら、何度も何度も繰り返す。
「あっ♡　おっ♡　おっ♡　おっ♡　あっ、あん♡　あっ♡　ひゃん♡」
プシッ、プシッ、と潮を吹く少女。
リズミカルに腰を打ち付けると、声にならない喘ぎ声を上げるだけになってしまった。
「で、でますっ……お姉さん、中に出していいですか？」
「はぁー……はぁー……ダ、ダメえ……中はダメぇ♡」
「でも……出したい……」
ほのかはおねだりをする。
くねくねと腰を回して少女の感じるポイントを総なめにした。
「んあぁ♡　しょれらめぇぇ♡　……あ、あなたのHなお嫁さんにな

るからぁ♡　な……なんでもする「ドビュ！」……しょ、しょんなぁ♡」
　卑猥な告白に心臓が高鳴ったほのかは、しかし、少女の潮吹き痙攣おまんこのもたらす快楽に耐えられなかった。
「しぇきにん……ぱくて……んあぁぁぁ♡」
　残りの精液を少女の子宮に流し込むため、びゅくり、びゅくりと、はち切れんばかりに勃起したペニスが脈動する。
　人生で初めて子宮の壁を精液で撫でられる感触に、少女は今日一番の絶頂を迎えた。
・
・
・
「……私は、ココネ」
　告解室から出た少女は、ほのかよりも背が低かった。
「絶対また来て。パク……お嫁さん契約するから」
「はい。必ず来ます」
　２人は抱き合い、キスをした。
「あ……ところで、ここってどこですか？」
「本当に迷子だったの……」

迷子2（相坂さよ　茶々丸　アナルセックス）

ココネの教えてくれた道を歩いていたほのかは、急に眠くなってしまう。
「こんなと……こ……きゅう」
そのまま眠ってしまうほのかの前に、金髪の美少女が立ちふさがる。
少女は腕を組み、忌々しそうにほのかを見下ろしている。
「ちっ。またこいつか。どうしてこう侵入者ではなく外ればかり引っかかるんだ」
「いかが致しましょうか、マスター」
「その辺に転がしておけ」
「了解しました」
エヴァの雑な指示に、茶々丸は深々と頭を下げる。
（この方は８２％の確率で宮崎のどかさんの弟の宮崎ほのかくん……手荒には扱えません）
茶々丸はほのかをそっと抱き上げると、近くの公園へ向かう。
そこはまだ人払いの結界の範囲内で、休日だというのに誰もいなかった。
茶々丸はベンチにほのかを横たえる。
「うう……」
「苦しそうですね……どこか打っていたのでしょうか……」
・
・
・
一方その頃、今日も誰ともお話できなかった相坂さよ（幽霊）は、公園でひなたぼっこをしていたら見覚えのある人物がやってきたことにテンションを上げていた。
「あ！　あれはクラスメイトの茶々丸さんじゃないですか！　抱えているのは……誰でしょう？　どことなくのどかさんに似てるような……」

ふよふよ浮いて近づいていくさよ。
「苦しそうですね……どこか打っていたのでしょうか……」
「どれどれ……うーん。そうですねー……あ！　す、すごくズボンが腫れあがってますよ茶々丸さん！　折れてるんじゃないですかね!?」
「サーチ完了。出血はなし……下腹部に異常な熱源あり」
「え？　ちょちょちょ、茶々丸さん？」
躊躇なくズボンをズリ下げる茶々丸に真っ赤になって顔を手で隠す（指の間からばっちり見ている）さよ。
少年のつるんとした、でも太くて長い勃起したペニスが露になる。
「これは……データベースを検索……少年の平均を大きく超えたサイズです、か」
「茶々丸さん、意外とむっつりですね？」
おちんちんの根元を握り、色んな角度から凝視する茶々丸。
「性的に興奮する要素はなかったはず……海綿体に何か異常が起こり、血流が滞っているのでしょうか」
「……？　かい、めん？」
「このままでは壊死の可能性も……」
「え〝。この子、おちんちんもげちゃうんですか?!　た、た、大変です！」
「検索中……検索中……あった」
茶々丸は立ち上がり、スカートの中に手を突っ込んだ。
ずるりとパンツを脱ぎ、それをほのかのペニスに巻き付ける。
「え……何やってんですか？」
「固いこの身が今は恨めしい……ふー、ふー……」
茶々丸はパンツ越しに手を上下に動かし、亀頭に息を吹きかける。
「そ、それじゃダメですよ。私に任せてください！　伊達にうん十年、夜のカップルとかオマセな生徒達がしていることを見続けてません！」
さよはスカートと下着を脱ぐと、ほのかの顔に跨り、おちんちんを舐め始めた。
「れろぉ……んふふっ。茶々丸さん息がくすぐったいです……んー

……んちゅ、んちゅ……まずは鈴口のちょっと上を舐めなめしてー……ちゅぷっ、ちゅぷっ……亀頭全体をぺろぺろしてぇ……んぅ……あむ……れろ……ふぅ……カリを唇でくぽくぽしてあげてぇ♡　かぽっ、かぽっ、んちゅっ、じゅぷっ、じゅる、じゅるる……ぷはぁ……裏筋をぺろぺろしてあげてぇ♡　……んー♡　じゅぽっ、じゅぽっ♡　じゅる、じゅるるるっ♡　はぁぁ……おちんぽっておいしいんですねぇ♡　……はむ……んちゅっ……じゅぽ、じゅぽ……じゅるるっ」

「カウパーが垂れてきました。射精は間近と判断します」

「れろれろ♡　じゅずず♡　じゅぷっ、じゅるる♡」

先走り汁が竿を伝い、茶々丸のパンツにシミを作る。

さよは一心不乱にフェラチオをしていたが、なかなか射精しないことに首をかしげる。

「おかしいですねー。そろそろビューって白いのが出るはずなんですが……し、仕方ありません。ついに私も処女を捧げる時、ですね！」

さよはウキウキしながら、おちんちんに手を添え、ゆっくりと腰を下ろしていった。

「痛たたた！」

あまり濡れていなかったこともあったが、さよの膣は狭く、いきなり挿入することは難しかった。

なにくそ、と体制を変え、勢いよく入れようとした時だった。

ずるっ。

ズン。

「お〝っ」

足を滑らしたさよは、思い切り尻もちをついてしまった。

狙いのずれたおちんちんは、さよのお尻の穴にズブリと入る。

「……あれ？　意外と気持ちいいですね」

小さいお尻をふりふりするさよ。

ペニス全体を優しく包み込むアナルの感触に、ほのかは無意識に射精を始めた。

「あ♡　あちゅい♡　お尻に知らない男の子のせーしが♡」

霊体を通り抜ける精液は、不思議な軌道を見せてほのかの服の上に

落ちていく。
　真名がいれば、腸を撫で上げながら通った精液がさよの子宮をくるんと滑り、その後体から飛び出ている場面が見れただろう。
「おい茶々丸！　どこまで行ってるんだー！」
「……陰茎の縮小を確認。よかった。大丈夫そうですね」
「……あ、もうおしまいですかー。私はもうちょっとHしたかったです。でも仕方ありませんね。人命第一です。んしょんしょ、っと」
　ハンカチでほのかの体を綺麗にしてあげる茶々丸。
　さよは名残惜しそうに腰を上げた。
　そそくさと公園を去っていく茶々丸を見送ると、さよは小さくため息をついた。
「はぁ……今回もお話しできなかったな……あんなに大胆なことしたのに……私ってどれだけ影が薄いのかなぁ」
　ふわりと浮き上がり、ほのかに添い寝するようにくっつく。
「それにしても、Hってあんなに気持ちいいんですね。皆があちこちで楽しんでいるのが納得できました……もう一回できないかなぁ……すごく立派で……おいしいおちんちん……はぁ……はぁ……♡」
　さよの右手がゆっくりほのかの股間を撫でる。
「お尻でもおまんこでもいいから……このおっきなおちんちんでぇ♡……ずん、ずん♪　って♡　……ねぇ～、シてぇ♡　好きなだけ私を抱いてぇ♡　……んちゅ、れろ、れろ……ちゅっ、ちゅっ」
　股間を撫でながら、乳首に吸い付くさよ。
　そんなことをしていると、急にペニスが熱く、固くなっていった。
「んむ?!」
　突然、さよは抱き寄せられ、キスをされた。
　顔を離すと、真っ赤になったほのかが自分のことを見つめている。
「え?　え?　うそ、私のこと、見えてる?」
「お姉さん。僕、しちゃうからね。いいんだよね?」
「うぐ、えぐ……も、もぢろんだよぉぉぉ」
　ボロボロ泣き出すさよに、ほのかはオロオロしてしまう。
「ぐす、ぐす。えへへ、ごめんね。嬉しくって……ふぅ……うん。もう

大丈夫！　さ、どんと来て♪」
「ほ、ほんとに大丈夫？　……じゃ、じゃあ、するね？」
ベンチに手をつくさよの腰を掴み、膣口に入れようとするほのか。
……と、膣の上にあるアナルがヒクヒクと蠢き、ピンク色の肉からトロリと白濁液が垂れるのが見えた。
「お姉ちゃん、お尻に入れてもいいですか？」
「あ、うん。まだ前は入らないから……あああああ♡」
「うああ……こっちも気持ちいい……」
膣とはまた違った感触に、ほのかは満足いくまでさよのアナルを堪能するのだった。

迷子3（月詠　中出しセックス）

「あ、そっちは変なのがいるんで、こっちの道にしましょう」
「そうなんですか？」
「それにしても、今日は妙なのが多いですねー」
　霊体のさよには見える〝よくないもの〟を避けながら、のどかがいるであろう場所を目指すほのかとさよ。
　そんな2人を木の影からそっと見つめる者がいた。
（あの子……どう見ても素人にしか見えないんやけど、うちが仕掛けた罠をことごとく躱しますなぁ）
　京都からの密命で潜入捜査をしていた月詠は、ど素人丸出しなのに妙に勘の鋭いほのかに興味を持った。
（うちと同じで、頭のネジが2，3本飛んでるんやろうか？）
　自分と同じ、という所が気に入ったのか、刹那と闘りあった直後で昂っている月詠の矛先がほのかに向かう。
「くすくす♪　ほな、センパイより先に唾つけてしまおうか♪」
　内股を、とろりと愛液が伝い落ちた。

・
・
・

「あのー」
「え？　……（わ、すごく綺麗な人だ）」
　ほのかはメガネをかけた美少女に声をかけられた。
　少女は照れているような、うっとりとした表情をしている。
「今お暇ですー？」
「おお！　ナンパですよこれ！　やるじゃないですかほのかくん！
このー、うりうりー」
「ええ？　えーと、そのー」
「良かったらうちと遊びませんかー？　京都から来たばかりでこの辺よく分からないんや」
　きゅ。

月詠が手を握ってきた。
「さ、最近の子は積極的ですね。これはかなり脈ありと見ました！私は遠くから見守っていますので、しっかり青春を楽しむんですよー！」
（え、さよお姉ちゃん？　1人にしないでー！）
さよはうふふ、と笑って薄くなっていった。
肝心な時に頼りにならない幽霊である。
「まずはあそこのアイスクリームでも食べませんかー？」
「え、アイス？」
「うちはストロベリーが好きなんやけど、えーと、うちは月詠いうんだけど、なんて呼べば？」
「僕はほのかです。よろしくね、月詠さん」
「よろしうなー。ほのかくん♪」
それからは、2人はちょっとしたデートを楽しんだ。
服屋を軽く覗いたり、ゲーム屋を冷やかしたり。
小一時間ほど遊ぶと、今日はセックスしどうしだったほのかに疲れが見えてくる。
「ちょっと休憩しよかー」
「はーい」
「ここ、ベッドが広くて落ち着くんやー」
「へ～」
月詠に手を引かれ、ほのかは何の疑いもなくラブホテルに連れ込まれてしまう。
不思議な感じがするホテルにキョロキョロしていると、部屋に着いた。
「さ、シャワー浴びよか」
「えっ」
「はい、ばんざーい」
（い、いいのかな……）
あれよあれよと月詠に流され、シャワーを2人で浴びることに。
服を脱いだ月詠は着やせするタイプのようで、思っていた以上に胸

が大きかった。
「気になりますー？」
「す、すみません」
「ええよ。うちも気になるし……」
「え……あ」
月詠にちょんちょん、とペニスを突かれた。
照れていると、月詠が耳に顔を寄せ、甘く囁いてくる。
「なぁ……触りっこせえへん？　うちのおっぱい……やぁらかいよ？
これは、2人だけの秘密や……んぅ……れろ……れろ……なぁ……
ええやろ？」
耳を舐められ、背中がぞくぞくする。
ほのかが小さく頷くと、月詠は嬉しそうにほほ笑んだ。
軽く体を洗い、月詠に手を引かれてベッドに横たわる。
目の前にDカップはあろうかという乳房が差し出され、ほのかは薄いピンク色の乳首を口に含んだ。
「あん。上手やね……ほんなら、うちはこっちを……」
少女の甘い匂いと柔らかくも張りのある乳房を堪能していると、股間をゆっくり撫でられ始めた。
「かわええなぁ♡　赤ちゃんみたいや……ほら……しこ、しこ……しこ、しこ♡　うちのお手々でいっぱいおもらししてええよ？　……しこ、しこ……しこ、しこ♡」
「ふぁ……」
月詠のあやし方が上手いため、力が抜けてうとうとしてしまう。
「しーこ、しーこ♡　しーこ、しーこ♡」
気が付くと、いつの間にか体勢が変わっていて、ほのかは甘く囁かれながら耳を舐められることに身を任せていた。
「すごく大きなおちんぽやなぁ♡　しゃぶってもええ？」
「ぼ、ぼくも……」
「うちのおまんこ、ぺろぺろしてくれるん？　ええよ……舐めっこしよーか♡」
目の前にとろとろの割れ目が差し出された。

クリトリスは皮に包まれていて、膣口は少し開いて奥からサーモンピンクの秘肉がテラテラと輝いている。
ほのかはクリトリスに舌を這わせながら、膣に指を入れてザラザラした感触を堪能する。
「あん♡　うちも負けてられんなぁ♡　はむ……ちゅぽ、ちゅぽ、ん♡　ん♡　……ちゅぽっ、ちゅぽっ、あぁ♡　ああん♡」
月詠は亀頭を執拗に舐め続け、ほのかが射精しそうになると根元をきつく握りしめた。
「お漏らしするなら、うちの中、な？」
仰向けになり、足を広げる月詠。
ほのかが覆いかぶさるように挿入すると、足を絡めて腰が引けないようにした。
「なぁんにも気にせんで、うちの中にびゅ～、びゅ～ってお漏らししして♡」
「本当に、いいの？」
「ええよ♡　うちの中で好きなだけ気持ちよくなって♡」
「……うん」
「ふふ、かわええなー♡」
抱き寄せられ、頭を優しく撫でられる。
腰は引けない。
ほのかは全身の力を抜いて、へこへこと腰を動かす。
月詠の中は汁気が多く、入れているだけで中が蠢くため、ペニス全部が気持ちよかった。
「……あ♡」
びゅー、びゅーっ、びゅー……。
我慢に我慢を重ねた上での絶頂ではなく、おしっこをするときのような、穏やかな射精だった。本当に漏らしてしまったのでは、と疑いたくなるような長い長い射精が続く。
「ん♡　あは♡　あっ♡　やっ♡　やあん♡」
月詠が可愛く喘ぐ。
きゅ、きゅ、と膣が伸縮を繰り返し、もっと精液を絞り上げようと

蠢く。
「はぁー♡　いっぱい出したなぁ♡　うちのおまんこ、気持ち良かった？　……うん。そかそか♡　うふふ、あんさんはホンマにかわええなぁ♡」
それからは少し休憩し、ふやけてしまうかと思うほど月詠がほのかのモノをしゃぶり、とろけるようなセックスをした。
・
・
・
長いようで短かった休憩が終わった。
「うちの小さな旦那はん♪　近いうちにまた来ますねー。んん～♡」
きゅ～、とほのかを抱きしめ、頬ずりをする月詠。
「ほなー♪」
「あ……」
月詠の姿が曲がり角を曲がって見えなくなる。
もう少し一緒にいたい。
後を急いで追いかけたが、曲がり角を曲がっても、月詠の姿はなかった。
その後、ニマニマしたさよと合流。
あれほど目的地に辿り着けなかったのが嘘のように、ほのかはのどかと出会うことができた。

x（夕映　素股）

（ふー、すっきりしたです……ん？）
　夕映がリビングの扉を開けると、雌顔をしたのどかが弟にしなだれかかっている所だった。
「フレンチキスー……」
「どうしたの？」
「んー♡」
「んむっ」
「ちゅっ……ちゅっ……ちゅぱっ、れろれろ……じゅる、じゅるるっ」
（あわわわわ……）
　なお、ほのかの体で見えなかったが、股間を弄っていた模様。
・
・
・
（ふぅ。もるところでした……ん？）
「じゅぽっ、じゅぽっ、じゅぽっ」
（え、なんの音ですか？）
「じゅぽっ、じゅぽっ、じゅず、じゅずずっ」
「あ。夕映お姉ちゃん」
「じゅずっ……」
　――ちゅぽんっ。ガサガサ、ジー。
　ソファに座っていたほのかが振り返ると、音は急に鳴りやんだ。
　そして顔の赤いのどかが慌てて体を起こした。
「あ、ゆえー、おかえりー」
「……（じとー）」
・
・
・
　また、ある時は。
（おしっこ……ん？）

浴室に明かりがついていた。
磨りガラスにシルエットが映っていて、立っている影がほのかで、しゃがんで顔を前後に揺らしている影は髪型的にのどかだろう。
「じゅぽっ、じゅぽっ、じゅる、じゅずずっ」
（またあの音ですか……ん？）
のどかが立ち上がり、お尻を突き出した。
ほのかの股間から伸びた、ごん太の黒い棒のようなものがお尻に向けられ……。
パン、パン、パン、パン。
「ちょお！　さすがにちょっと待つですよ!?」
バーン。
扉をけ破る勢いで夕映は突入した。
実は誤解でしたということもなく、２人は実の姉弟で、がっつり結合していた。
「あー、ついにバレちゃったかー」
「パ、パル？」
湯船に浸かっているハルナはざばっと立ち上がると、夕映の背中を押して浴室から連れ出した。
「パル！　止めなくていいんですか！」
「いいのいいのー」
「はぁ?!」
「まぁまぁ、落ち着いて。ちゃんと説明するから。つまりね、かくかくしかじかな訳なのよ」
「ぬぅ……そういうことですか」
「そ。これは治療なわけ。夕映も手伝ってあげてね」
「なっ……む……うー……い、嫌ではないですが、行き過ぎではないです？」
夕映の感覚では、のどかはまだしも実の姉でもない自分がそういうことを治療とはいえ行うことにためらいがある。
「んー。でも夕映は無自覚に弟くんを誘惑してるからねぇ」
「？」

「ちっぱいはシャツから覗きまくりだし、パンチラは当たり前だし、しょっちゅう紐パン取れてツルマン晒してるし」
「ちょ、教えて下さいよ！」
「あははー、ごめんごめん」
「お風呂空いたよー」
　説明がひと段落したところで、バスタオル姿のほのかとのどかがやって来た。
　のどかは今まで黙っていたことを謝罪し、夕映は事情が事情なので無理もないとそれを受け入れる。
「え……夕映も手伝ってくれるの？」
「あ、ありがとう、ございます」
「さ、さすがに手とか口だけです、よ？」
（それはどうだろうね～？）
　かくして、夕映も参加するようになったのだった。

・
・
・

「夕映お姉ちゃん……」
「あ……ダ、ダメですよ。のどかに悪いです」
「スンスン」
「に、匂いもかいじゃダメなのです……」
　それからというもの、ほのかが甘えてくるようになった。
　ガッツいてくるかも、と身構えていた夕映だったが、ほのかは抱きついてくるのがせいぜいで、手を繋ぎたがったり、よく後ろをついてくるようになる程度だった。
（あ……おっきくなってきたです）
「あ、立っちゃったからお姉ちゃんのとこに行ってくるね」
　勃起するとパッと身を離し、のどかかハルナに処理してもらう。
　そんなことが数日続いていたが、年頃でそういうことに興味が出てきたこと、手伝うと言ったのに何も、どころか無用に勃起させてばかりなことに後ろめたさを感じていた夕映は、ほのかの手を握って引き

留めた。
「ま、待つです。今日は私がするです……」
「嬉しいよ、夕映お姉ちゃん……ちゅっ」
「んっ（笑うとのどかにそっくりなのです……）」
２人はついばむようなキスを繰り返す。
夕映の力が抜けたのを見計らい、ほのかは舌を入れた。
「んちゅ、ぴちゃぴちゃ……はぅ……ふぁ……ぴちゃぴちゃ、ちゅぷ、んむ……」
（これ、意外と気持ちがいいのです）
ほのかの舌は少し甘く、いつまでも味わいたいと思えた。
（む、私ばかり楽しんでいてはいけなかったです）
「お姉ちゃん？」
「私が上になるので、横になるですよ」
「う、うん」
ソファーに仰向けになるほのか。
夕映はパンツの紐を引っ張り、ほのかのペニスの上に跨った。
無毛のおまんこ（濡れてる）が竿に押し付けられる。
「ん……ん……」
「ふぁ」
くいっ、くいっ、と腰を前後に揺する夕映。
ほのかとしては物足りなかったが、夕映が顔を赤くしながら積極的に自分のペニスに腰を振る光景はなかなかくるものがある。
自分からも腰を動かし、夕映の割れ目にグイグイと押し付ける。
「ひゃう♡」
クリトリスを擦ったようで、夕映が可愛い声を上げる。
普段と変わらぬ制服姿の夕映。
着たまま抱く、という新しいシチュエーションに、ほのかは興奮してきた。
「そ、そろそろ出ます」
「はぁ、はぁ……あ、制服に出されると困るのです……んしょ」
夕映はほのかから下りると、亀頭を口に含んだ。

「ちゅうちゅう……ん……これは……なかなかおいひいれす……ん……くぽ、くぽ、くぽ、くぽ……ん……ちゅぷ、ちゅぷ、ちゅぽ、ちゅぽ……」

びゅくん、びゅるっ、びゅるるるっ。

「ん……こくっ……こくっ……こくん……ぷは……気持ちよかったですか？　あ、まだ出てるです……ちゅうちゅう……ちゅぽっ、ちゅぽっ、ちゅるる、ちゅっ……ぷはぁ……あ……先っぽが良いんですよね？　のどかに聞いたです……」

夕映は髪をかき上げると、先っぽに舌を押し付け、レロレロと小刻みに動かし始めた。

イッたばかりで敏感なところに、亀頭攻めをされ、ほのかの腰がビクビクと震える。

ドライオーガズム特有の、さらりとした透明な液がトプトプと溢れてきた。

「じゅず、じゅるる……ん……これもおいひいれす……今のが良かったれふか？　れろれろ、れろれろ……ん。少し辛そうですね。こうしたらどうですか？　くぽくぽ、くぽくぽ……」

夕映は裏筋を時折舐めながら、亀頭を口に含んで吸い付いた。

「ちゅぽちゅぽ、ちゅぽちゅぽ……ん……あむ……くぽくぽ、じゅぽっ……ちゅぽちゅぽ、ん……こくっ……ちゅぽちゅぽ、ちゅぽちゅぽ……ん……ん……こくん……こくん……えへへ。またらひまひたね♡　んー……ちゅぽちゅぽ、ちゅぽちゅぽ……ちゅるっ、ん、ん……甘くて、あたまが痺れるです……んちゅんちゅ……くぽ、くぽ、くぽ……ん、ん……こくん、こくん……ちゅるるっ、じゅるっ……ん、ん……じゅぽ、じゅぽ、じゅぽ、じゅぽ……ふぅ、ふぅ……くぽくぽ、じゅぽっ……じゅる、じゅる、くぽくぽ、くぽくぽ……ん……こくっ……こくっ……こくっ……ん……ん……じゅぽじゅぽ、じゅぽじゅぽ……」

夕映は終わりのタイミングというものが分からず、1時間後、のどか達が気づくまでおしゃぶりは続いた。

発情期（桜咲刹那　中出しセックス）

バスタオル1枚の真名は、熱っぽい視線を送ってくる刹那に白い眼を向けた。
「お前……本当に大丈夫なんだろうな」
「あ、当たり前だ」
ピロリン。
丁度いい時にメールが届いた。
送り主は月詠。
「なんだ……？」
『件名：おばんでやすー
ｆｒｏｍ：月詠
本文：センパイへ♡　そろそろ発情期なんやないですか？　うちはどこの馬の骨とも分からん男にセンパイが股を広げていないか心配です。今日はそんなセンパイに良い人を紹介しよう思ってメールしました。なんとまだ〇才の男の子。すごく立派なおちんちんなのでセンパイもきっと気に入ると思います。
Ｐ．ｓ．ちなみにうちもメロメロです。一緒に竿姉妹になりましょう♡』
添付された写真を見ると、月詠が少年の巨根を咥えながらカメラに向かってピースをしているところだった。
刹那は乱暴に画面を閉じた。
「なんだ？　仕事か？」
「なんでもない」
「……？」
不機嫌な刹那に、触らぬ神に祟りなしと特に質問することはしない真名だった。
・
・
・
「んああ♡　やめてくださ♡　イク、またイッちゃ……やあああ♡」

三日後。
刹那は電車で３０分のところにある旅館で、ほのかに抱いてもらっていた。
混浴風呂でのぼせるまでキスしながらお互いの体をまさぐり合い、今は布団の上でほのかに一方的に愛撫されている。
ほのかは刹那が初めてということで、いっぱい感じてもらおうと躍起になっていた。
もうかれこれ３０分程、クリトリスを舌で弾き、膣、特に感じるＧスポットを執拗に指の腹で撫でていた。
「あっ♡　やっ♡　イクイクイクイクぅぅぅ♡」
刹那の腰が浮き上がり、潮を吹きながらブルブルと震える。部屋には人払いの他に防音の結界が張られているため、刹那は抑える必要がなく、思うがままに喘いでいた。
息も絶え絶えの刹那は、ほのかに手を伸ばして「抱っこして」のポーズをした。
「きゅ、け♡……きゅーけぇ♡……ちゅう……してぇ♡」
烏族の発情期を迎えた刹那は、瞳にハートマークを浮かび上がらせんばかりにほのかを求める。
ほのかが顔を寄せてやると、刹那は拙いながらも懸命に舌を絡める。
「んちゅ♡　んちゅ♡　れろぉ♡　……しゅきぃ♡　しゅきれす♡　ごしゅじんしゃまぁ♡」
その場の雰囲気で言ってしまったであろう、卑猥な言葉。
庇護欲を掻き立てようとして放たれた言葉は、しかし、逆に少年の中の加虐心に火をつける結果となった。
「ごめんね刹那お姉ちゃん。もう、我慢できないんだ」
「え……」
ズン。
「……あ、あぁ」
股間を見ると、長かったほのかのペニスが、ほとんど根元まで入っていた。

「〜〜〜〜!!!」
遅れてやってきた快楽の波に、刹那は全身を翻弄される。
乳首は痛いほど上向きに尖り、手は布団のシーツを引きちぎらんばかりに握りしめ、首を左右に激しく振って快感に激しく痙攣する刹那。
「え？」
その余波はほのかにも襲い掛かった。
バイブのように小刻みに伸縮する膣肉にペニスをがっちりと咥えこまれ、刹那が激しく痙攣するため全力で出し入れしているようなことになった。
ほのかは出る、と思った瞬間には我慢することすらできず、刹那の中で爆発する。
「あ……が♡　あは♡」
ばたり、と刹那は気絶してしまった。
意識を失っても身体は依然、快楽に飲まれたままでビク、ビク、と痙攣を続けている。
ほのかは射精してもペニスを擦られる快感にガクガク震えながらなんとか耐え、3度程射精をしてようやくペニスを抜くことができた。
ぬぽ……どろぉ。
糊かうどんのように濃い白濁液が刹那の膣口から流れ出た。
「しゅ、しゅごかった……」
刹那の膣は名器過ぎた。
気絶した刹那をオナホ扱いするのは止めておき、ほのかは快楽の波が引くのを待つことにした。
・
・
・
ちゃぷ、ちゃぷ、ちゃぷん。
2人は再び混浴風呂に入っていた。
先ほどと違うのは、ほのかが主で刹那が従者、という関係だ。

現在、お湯から腰を浮かせた幼いご主人様のペニスを刹那は愛おしそうにしゃぶっている。
「刹那、おいしい？」
「ふぁい……おいひい、れす……ちゅぽっ、じゅぽっ、じゅぽっ……あむ、れろれろ……あむ……」
「何がおいしいの？」
「お……んぽ、です」
「なぁに？」
「ご主人様の……おちんぽ、です……はむ、れろ、じゅぷ……じゅぷ……」
「刹那、今度は奥まで咥えて」
「はい♡　……んぶ……ん、んぐ……」
息が苦しくなっても、長いペニスを健気に飲みこんでいく刹那。
「気持ちいいよ、刹那……そのまま好きに動いて」
「♡」
刹那は喉を膣に見立てて、できるだけ速く頭を前後に揺らし始めた。
「あっ……あっ……気持ちいいよお姉ちゃん」
「ぷはぁ……けほっ、けほっ……ご主人様、どうか、今は刹那と呼び捨てで」
「う、うん」
刹那は気絶してからというもの、しきりに自分を下に置くように頼んでくる。
ほのかは失礼だから遠慮したいのだが、刹那が何故か喜んでいるようなので「エッチの時だけ」ということになった。
「刹那、後ろ向いて？」
「はい。どうぞ好きなように使ってください♡」
お尻を突き出してくる刹那の腰を掴み、ほのかはゆっくりと挿入していった。

授業中に勃ったら（雪ちゃん　フェラ　アナル）

担任の先生が産休でこなくなり、代わりに源しずな先生（巨乳美女）が受け持つようになった。
おかげでほのかはしょっちゅう勃起してしまう。
（ほのかくん。またおっきくなっちゃったの？）
股間を押さえていると、隣の席の雪ちゃんが心配してくれた。
「せんせー。宮崎くんが調子悪いそうなので保健室に連れてい行きまーす」
「あら……お大事にね」
他の生徒にバレないように、股間をズボンとシャツで隠しながら保健室へ向かう。
その様子が本当に腹痛を抱えているように見えるので、疑問に思うものはいなかった。
・
・
・
「保健の先生今日もいないね。いついるんだろ？」
ベッドのカーテンを閉める。
ほのかがベッドの上で仰向けになると、雪ちゃんもベッドの上で四つん這いになって、ズボンに手をかけてきた。
カチャカチャ……ジー。
「わぁ。今日もビンビンだね……ちゅ♡」
「んっ。いつもありがと、雪ちゃん」
「ぺろぺろ……ううん。私も気持ちいいし……んぅ……ぺろぺろ……はぁ♡　かたい……れろ、れろ……ちゅっ……ね、きもちいい？」
「うん」
「えへへ。れろれろ……ちゅ♡」
雪ちゃんはペニスをまんべんなく舐めるのが好きだ。
ほのかは手を伸ばし、最近膨らみ始めた雪ちゃんの胸を愛撫する。
雪ちゃんは舌を裏筋にぺた、とくっつけてから舐め上げたり、亀頭

の周りに舌をくるくるさせて射精へ導いていく。
「ちゅぱ……ちゅぱ……ふぁぁ♡」
雪ちゃんの瞳がとろんとしてきた。
「雪ちゃん、そろそろ入れていい？」
「今日はちょっと早めだね」
雪ちゃんはパンツを脱ぎ、仰向けに足を広げた。
スカートがめくれ上がって、ツルツル1本線の割れ目が露になる。
「お子様おまんこ、召し上がれ♪」
「それじゃあ先っぽだけ……」
亀頭を押し付ける。
くちゅ、と膣が広がり、雪ちゃんは同級生の男子を受け入れていく。
ぬぷぬぷ……ぬぽん。
亀頭が膣肉にぴったりと包まれたら、ゆっくりと引き抜く。
少しだけ口を開いた膣は、すぐに閉じて元の1本線のようになってしまうが、ペニスを押し付けると、抵抗が緩くなって徐々に飲み込んでくれるのだ。
にゅぷぷ……ぬぽん……にゅぷぷ……ぬぽん。
「あ♡　……んん♡　……あっ♡　……ああん♡」
何度も入れたり出したりを続けると、ペニスが雪ちゃんの愛液でびしょびしょになってきた。
「それじゃあ、いくね」
「うん……あ♡」
ほのかは下にずらし、薄いピンクのロリアナルに押し込んでいく。
始めはきついリングに挿入を阻まれるが、雪ちゃんが深呼吸をして力を抜くと、にゅるりと奥の方へ飲み込まれていった。
じゅぷじゅぷ、ぬぷぷ、ずるるん、じゅぷじゅぷ、じゅぷじゅぷ。
「ああん♡　すごく熱い♡　それに、かたくて長いよ♡」
ほぼ毎日ほのかのおちんちんを受け入れているロリアナルは、涎を垂らしながら美味しそうにしゃぶりついて離さない。
「あっ♡　そこすご、あん♡」
腰を動かしながら、雪ちゃんのクリトリスと膣口を弄る。

最近覚えたGスポットを探ると、雪ちゃんが可愛く喘いで場所を教えてくれた。
「ふにゃあ♡　それ、それすごい♡　あ♡　あ♡　あ♡　ああ♡」
ほのかが射精すると、雪ちゃんも絶頂を迎えた。
ロリアナルの上で、未だに処女のままのお子様おまんこが潮を吹く。
雪ちゃんには大分前から片思いの男の子がいると聞いたが、未だにこうしてほのかを受け入れてくれるところを見ると、まだ告白などはしていないようだ。
その辺りどうなのか聞いてみると、雪ちゃんは苦笑いをした。
「はる樹くん、まだそういうことに興味がないみたい。当分、ほのかくん専用のお子様おまんこだね」

噂の魔法少女（愛衣　受精）

麻帆良学園で実(まこと)しやかに囁かれる噂の中に、次のようなものがある。

――困った時は、魔法少女や魔法オヤジが助けてくれる。

あながち嘘でもない。

そんな体験を、ほのかはすることになる。

・

・

・

電車の中で、ほのかは夢を見ていた。

騎乗位で裸ののどかが微笑みながら腰を動かしていて、右の乳首をハルナ、左の乳首を夕映が舐めている。

ドピュ、ドピュッ。

射精すると、今度はハルナが上になり、大きな胸を揺らしながら腰を動かし始める。

夕映の順番になり、射精するとまたのどかの順番になり……。

3人のお腹はだんだん膨らんでいき、割れ目から精液を垂らしながら、幸せそうにお腹を撫でていた。

「……はっ」

気が付くと、そこは知らない駅だった。

「んっんっ、ちゅぶっ、ちゅぶっ」

「え？」

ツインテールの女の子がフェラチオをしていた。

あまり上手くなく、たまに歯が当たっている。

「あ、気が付きました？　苦しそうだったので、人払……んんっ。人のこない駅でとりあえず応急処置をしていました。宮崎ほのかくんだよね？」

「そ、そうです」

「ほ……良かった。人違いだったらとんだ変態ですよ、私」

ほのかでなければ、寝ている少年をしゃぶる痴女、もとい性犯罪者

だった。
「続きをしますね。はむ……ちゅぷ、ちゅぷ……んっんっ……ちゅぷ、ちゅぷっ、んんっ……」
シコシコと手も動かしてくれているが、ポイントを外しているので、やはり気持ちがよくない。
初対面で、見知らぬ場所というのもよくないのかもしれない。
ほのかは気が引けるが、おずおずとやり方をレクチャーすることにした。
――十数分後。
「んぶ♡　んんー♡」
ベンチの上で2人はシックスナインの態勢になって、お互いの性器に舌を這わせていた。
ぴちゃぴちゃ、くちゅ！　くちゅ！　くちゅ！　くちゅ！
「んんー♡　んっ♡　んっ♡　んー♡」
開始数分で早々に弱点を知り尽くされてしまった愛衣は、教えてもらったテクニックを満足に使うこともできず、少年のちんぽを咥えてただ喘ぐだけとなっていた。
（イッちゃう！　またイッちゃうー！）
プシュッ。
「あー♡」
愛衣の視界が白く染まっていき、少女は意識を手放してしまった。
自分の下で動かなくなってしまった愛衣に頬をかくほのか。
「どうしよう。僕まだイケてないんだけど……ハルナお姉ちゃんみたいにお口を借りるか」
ほのかは愛衣の頭を上に反らして、ずぼ、と一気に貫いた。
肉棒が太すぎて喉が膨らみ、ジュボオ！　と大きな音が出る。
窒息しないように気を付けつつ、喉を両手で包む。
気持ちが良いところまで握って、オナホを使うように腰を激しく動かしていった。
ジュボオ！　ジュブ！　ジュボ！　ジュポオ！
「うっ」

ギリギリのところで引き抜いて、愛衣の顔にぶっかける。
髪はもちろん、顔中に白濁液が降り注いだ。
「……ん、あ」
愛衣が意識を取り戻した。
最初に目に入ったのは相変わらず固くそそり立ったおちんちん。
既に射精して自分の顔をドロドロに汚したとは気づいていない愛衣は、早く射精させてあげなきゃ、と最後の力を振り絞る。
「ほのかくん……私のここに、いれていいよ」
「で、でも、お姉さんは初めてじゃ……」
「いいの。でも、できればやさしくしてね……」
気絶する前の絶頂の余韻と、気絶中にさんざん刺激をされた喉の快楽ポイントによる絶頂の波に全身を震わせながらも、愛衣は健気に足を広げてほのかを誘う。
「お姉ちゃんっ」
ずぶぅぅぅぅ。
「んあああああ♡」
『初めては一気にした方が痛くないよ♪』とハルナが言っていたので、ほのかは奥まで一気にペニスを挿入してしまった。
愛衣は、プチっと何かが破れる感触がした気がしたものの、次の瞬間に襲ってきた快楽の奔流にそれどころではなかった。
「ああ♡　あっ♡　あん♡　あんっあんっあんっ♡」
軽めの絶頂の間にも、容赦ないピストン運動を刻まれる愛衣。
より深い絶頂に押しやられ、その波が引く間もなく、さらに深い絶頂に愛衣は晒されていく。
涙と涎を垂れ流し、頭を左右に激しく振りながら、この快楽地獄が早く過ぎ去ることを懇願する。
「しぇーし♡　はや、く♡　しぇーし♡　あんっあんっあっあっあっあっあっあんっ♡　はやく♡　あっあっ♡　しぇーしぃ♡」
出せば終わる。
そう思っている愛衣の願いに応じるように、ぎゅんぎゅんと膣がペニスから精を絞り上げようと蠢動（しゅんどう）する。

既に子宮口は下がり、どちゅどちゅと押し付けられる亀頭のキスを受け入れてしまっていた。
「うあああっ」
ドビュウ！　ドビュ！　ドク！　ドク！　ドク！
「あぁ♡　しぇしきたぁ♡　あちゅいよぉ♡」
愛衣の子宮に、大量の精液が流れ込んでいく。
そこへ無防備な卵子が1つ、ふよふよと卵管から放出された。
精液でできた白いプールに何も知らない無垢な卵子がちゃぽんと落ちる。
――つぷっ。
一番乗りの精子が卵子に入り込んだ。
それ以上は乗り込めないが、少年の元気な精子は愛衣の卵子を取り囲み、全方位から延々とついばみ続ける。
「はぁ、はぁ、はぁ」
最期は不思議な満足感を得られたほのかは、珍しく1回の射精で鎮まった。
（うう……愛衣、よく頑張りましたわね……）
なお、妹分の奮闘を高音はこっそりと見守っていた。

相性よし（エヴァ　騎乗位　中出し）

「あ……」
ふいに見上げた空を蝙蝠が横切った。
それは彼女が待っているという合図。
・
・
・
「また別の女の匂いがするな。私で塗りつぶしてやろう……ん……」
「あむ……ん……」
保健室。
ほのかはベッドに押し倒され、そのまま唇を奪われた。
「ちゅる……ちゅる……ぷはぁ……」
2人の唇が唾液の橋で繋がる。
ほのかがそっと目を閉じると、エヴァが顔を寄せてキスをする。
エヴァの背中に手を回し、包みこむようにそっと抱きしめた。
「んんぅ」
鼻にかかったため息を吐くエヴァ。
彼女は穏やかな触れ合いがお気に入りで、されるよりもする方が好みらしい。
エヴァは唾液を溜め、口移しで飲ませてくる。
「ぷはぁ……まだ飲むな……よし……飲め」
「……こくっ」
「ふふ……いい子だ……んちゅ……ちゅっ……んっ……はぁ……」
熱い吐息が肌をくすぐる。
エヴァは顎、首筋とキスを落としていき（首筋は何故か念入りに舐める）、鎖骨、乳首に到達すると舌先で乳首を転がし、ズボンの上から亀頭、竿と順番に撫でていく。
「あっ」
布越しにあやすように撫でられるのは、刺激が薄いが、何故か病みつきになる。

「相変わらず大きいな……昨夜も実の姉を、これでさんざん鳴かせたのだろう？　……悪い坊やだ……」
　下着の中で痛いほど勃起してくると、エヴァはようやくジッパーを下ろし、トランクスから取り出してくれる。
「どうする？　もう入れるか？」
　頷くと、エヴァはもう片方の乳首を指でカリカリと弄りだした。
「坊やの1番は……私ではなく、姉ののどかだろう？　……いいのか？　のどかと愛し合って……まだ1日も経ってないぞ？　……私を抱いたら……のどかは悲しむぞ？」
　答えに悩んでいると、エヴァが先っぽを咥え始めた。
「んっ、んっ……ちゅぽっ、ちゅぽっ……ふふ……かわいいなぁ……坊やは……あむ……ちゅぽちゅぽ、ちゅぽっ、ちゅぽっ……♡」
「ああっ……エヴァお姉ちゃんっ」
「ぷはぁ……おっきい……あごがはずれてしまうぞ……はむ、くぽ、くぽ……ちゅぽっ、ちゅぽっ……ぷはぁ……」
　エヴァは起き上がると、割れ目に亀頭を当て、ゆっくりと腰を下ろしていった。
「ふふ……時間切れだ♡　……んぅ……れろ、れろ……んっ……」
　タン、タン、タン……。
　乳首を舐めながらエヴァが腰を上下に動かす。
「気持ちいいか？　……そうか……気持ちいいか♡　……よしよし……いい子だ……姉のことは忘れて……好きなだけ中に出すといい……」
　タン、タン、タン……。
　びゅる！　びゅるるる！
「ん♡　……たくさん出したな♡」
　タン、タン、タン、グリグリ、グリグリ……。
「エヴァお姉ちゃん、イッてるから、イッてるからぁぁ……！」
「ククク……ダメだ♡　空っぽになるまで出せ♡」
　グリグリグリ。
「出せ♡」

タンタンタンッ、グリグリグリッ。
「出せ♡」
びゅる！　びゅるるる！
「……♡」
根元まで咥えながら、エヴァは嬉しそうにぎゅーっと抱きついてきた。
・
・
・
「……（むす）」
「えーと、どうしたの、エヴァお姉ちゃん」
「なんでもない……おい、明日も呼ぶからな。絶対来るんだぞ！」
「う、うん」
「フン。では、私は帰る」
エヴァはピシャ、とドアを閉めていった。
「そういえば、エヴァお姉ちゃんて何年何組なんだろ……」
休み時間も掃除の時間にも見かけないことに、ほのかは少し不思議に思った。

看病（那波千鶴　正上位）

「あの、千鶴さん。弟のことよろしくお願いします」
「安心して宮崎さん。ほのかくんは責任を持って看病するから」
ほのかが風邪を引いた。
しかし、のどか達3人はハルナの〆切前で忙しく、困っていたところに千鶴が運よく通りかかった。
・
・
・
「いっぱい汗をかいたわね。着替えましょうか」
「はい……ありがとうございます」
千鶴は慣れた手つきでパジャマを脱がすと、タオルで汗を拭いていく。
もにゅん。
（あわわわ）
背中に千鶴の大きな胸が押し付けられる。
「足の内側も拭きますねー」
「あっ」
「……あら」
トランクスにテントを張っているのがバレてしまった。
「あの、すみません千鶴お姉さん」
「気にしなくいいのよ。男の子だもの」
千鶴はほのかを抱き寄せ（胸に顔を埋めることになった）頭をよしよし、と撫でる。
「事情は聞いていますから、このまま一回出してスッキリしちゃいましょうか♪」
「え、ほ、ほんとに？」
「うふふ」
ぽふり。
ほのかはベッドに押し倒された。

千鶴も裸になり、棚から小箱を取ってくる。
「なんですか、それ？」
「え？　コンドーム、知らないの？」
「はい……」
（まだ出ないのかしら……）
千鶴はコンドームを脇に置く。
ほのかの上に跨り、ペニスに手を添え、膣口に亀頭を合わせた。
ずぷ……ずぶずぶずぶ……。
「あぁ……おっきぃ……あん♡」
目の前にはゆさゆさと揺れるおっぱい。
ほのかは手を伸ばし、柔らかい感触を味わう。
じゅぷ……じゅぷ……じゅっぷ、じゅっぷ……じゅっぷ、じゅっぷ……。
「んん♡　あっ、すごい、こんなに奥まで届くなんて♡　（玩具と全然違う♡）」
「千鶴お姉さん……」
「え？　あ、ダメよ？　ほのかくんは大人しく……」
ほのかは千鶴を押し倒し、覆いかぶさったまま腰を動かし始めた。
ぱんっ、ぱんっ、ぱちゅんっ、ぱちゅんっ、ぱんっ、ぱんっ、ぱんっ、ぱんっ。
「んぅ♡　んっ、ふぅ、んっ、んっ、んんっ♡」
声が出ないように口を押えるが、突かれると我慢できずに声がもれてしまった。
「千鶴お姉さん、僕……出そうです」
「あっ、あっ……が、がんばり、まし、たねっ……いっぱい出していいのよ♡　……あら？」
初めてのセックスのため熱に浮かされていたのか。
千鶴はここにきて、自分が勘違いしていたことに気づいた。
「ご、ごめんなさい。最後はお口に出してくれる？」
「え？　わ、分かりました」
「んっ♡」

ぬぽん、とペニスを引き抜くと、ほのかは千鶴の胸に跨って、おちんちんを両側から挟んでフィニッシュに向けて動きだした。
クッチュクッチュクッチュクッチュ……。
びゅる！　びゅっびゅっびゅー！
「きゃ」
胸の谷間から大量の精液が噴出し、千鶴の顔を白く染め上げる。
「はぁぁ……」
「うふふ。気持ち良かった？　もう、あんなにはしゃいで……ほのかくんは、病人なのよ？」
「あ……すみません」
「ふふふ。綺麗にしてあげるから、大人しくしててね？」
千鶴はほのかを仰向けにした。
髪をかき上げる仕草。
精液に塗れた、ふるふると揺れるおっぱい。
「れろれろ……ちゅるる……じゅる、じゅるる……」
千鶴のお掃除フェラは丁寧だった。

配信準備（桜子、美沙、釘宮　露出セックス）

「ね、ね。私らもやってみない？」
「いーねー！」
「やろうやろう！」
　チアリーディング部の美沙、桜子、釘宮は流行りの動画配信に興味を持ち……。
「えい♪」
「やーん♪」
「ちょー!?」
　録画中に桜子が悪ノリして釘宮のスカートを捲ったり……。
「じゃーん……ふふふ♪」
「ブーッ。あんた、これエロすぎ」
「アハハハハッ」
　編集を弄って、突然全裸になる動画を作ったり……。
『○～♪　◇～♪』
「……こ、これはアウト？　セーフ？」
「服着てるからセーフ！」
　罪、と書かれたマスクを被った少年に後ろから突かれる疑似セックスの動画を作ったり……。
　彼女たちの中で動画作りの熱は白熱していく。
「それなら私はこうよ！」
「おー！」
「割と普通……」

　釘宮は水着でダンスを踊って胸を揺らしている動画を披露。
　すると途中で少年が画面手前に「ＫＥＥＰ　ＯＵＴ」と書かれたテープを張り、釘宮の胸と股間を隠した。
「おおー！」
　動画の中で少年に水着を奪われる釘宮。
　テープで上手く隠れているが、恥じらった表情の釘宮が新鮮なダン

スが続いていく。
「わ……」
「この子やるねー！」
頃合いをみて、今度は胸を隠していたテープが地面に落とされた。
釘宮は慌てて胸を押さえるが、踊りで横乳や下乳など、隠しきれない部分が丸見えになる。
次に少年はテープを拾いあげて再び胸が隠れるように張り巡らせた。
釘宮は隠すのを止め、元気よく踊りだす。
なお、テープでは隠れきれない胸が見え隠れしているが、釘宮は気づいていない。
「アハハ、クギミーどんかーん」
動画の中で釘宮は下の水着を脱がされていた。
水着は上下とも紐で縛るタイプで、脱がしやすい。
真っ赤な表情の釘宮が、あそこを押さえながら踊っている。
テープの位置はよく調整されており、ターンしたり、ステップを踏む度、お尻などが見え隠れしていた。
『……』
「あ、また取られてるー！」
釘宮の後ろに回った少年が上の水着をはぎ取った。
釘宮は踊りを続けるも、テープの向こう側で胸を揉まれている様子が容易に想像できる。
『〇〜♡　◇〜♡』
「クギミー、これ感じてきてないー？」
「えろー♪」
「う、うるさいわねー」
『〇〜♡　っ』
「おお?!」
少年の腕が釘宮の股間に伸びた。
釘宮は口を押え、何かを懸命に堪えている。
少年はすぐに手を離し、ポケットから何かを取り出した。

「ハサミ?」
「あ、切られた」
下のテープがひらひらと落ちていく。
上のテープも切られ、やはりひらひらと落ちていく。
少年の手がおっぱいをこねくり回している姿が露になった。
『……♪（カメラに向かって決めポーズ）』
ちょうどそこで曲が終わり、画面がゆっくり暗くなっていく。
だが、少年の悪戯は続いており、釘宮のおっぱいを揉みながら、あそこにも手を伸ばそうとする少年と、それを止めようとする釘宮の攻防が少しだけ垣間見え、釘宮が負けそうになったところで画面は完全に暗くなった。
「いいねいいねぇ！　これは視聴率うなぎ登り間違いなしだよ！」
「次は私だね♪」
「桜子か。なんか心配ね……」
２人が見守る中、桜子の動画がスタートした。
『○○～♪』
画面の中で桜子と少年が手を繋いで歌を歌っている。
『◇～っ♪』
「おいおいおい」
やはり普通には終わらなかった。
桜子が少年の前に移動……画面に背中を向けて、しゃがんでいく。
少年が手で制止しようとするのを払いのけながら、明らかに何かしている様子の桜子。
こちらを振り向き、手を口の前で動かしてフェラチオアピールをし、再び少年の方へ向き直る。
『○～♪　◇～♪』
曲が流れる中、顔が真っ赤な少年は桜子の頭を抱えて震えている
桜子が離れ、少年が床にへたり込んだ。
「おま」
股間にモザイクがかかった。
ミニスカートを押さえながら、桜子が少年の上に座るとモザイクが

消える。
それからは桜子が少年の上で歌う動画が流れ続けた。
時折、少年がビクッ、ビクッと震えている姿が印象的だった。
「あんたー！　完全にヤッてるじゃないのー！」
「にゃははは」
ガクガクと揺らす美沙。
「いやー桜子もしちゃってたかー」
「え……釘宮、あんたまさか」
「あの後私もムラムラしちゃって……ははは－」
「あんた達……」
「まーまー。私達フリーなんだからいいじゃん♪　ね、ね、美沙はどんなの撮ったの？」
「え？」
『……（にこ♪）』
「お……えっちぃけど、意外とまともじゃん」
「ほえー」
制服姿でリズムに乗る美沙。
程なくして、一瞬でマイクロ水着に変化した。
テンポの良いリズムにのってぴょん、ぴょん、と軽く跳ね始める。
ぽよんぽよんと揺れる乳房がエロいな、と桜子達は思った。
『……！』
突如、上の水着が解けて落ちた。
ハートマークのシールが乳首に貼ってあり、カメラが美沙の胸にズームアップされる。
画面の外から誰かの手が伸びてきて、美沙の胸を2，3度揉むと、カメラは元の位置に戻っていった。
『……♪　……♪』
画面が切り替わり、美沙の股間がアップにされた。
ほぼ紐のような水着は美沙の割れ目に食い込んでいて、具が見えそうで見えない。
『……♡』

美沙が指で広げ、薄ピンク色の具が見えた。
カメラが切り替わり、高校生くらいのパンイチの青年（罪とかかれたマスク着用）が登場。
股間から生えたペニスバンドに美沙が腰を振り、割れ目をこすりつける。
『……♪』
手でハートマークを作り、後ろの青年がその中に指を抜き差しした。
『……♡』
「ん？」
次の場面では、上半身だけの美沙と左右に裸の罪マスクと、それより背の低い罪マスクの後ろ姿。
美沙は笑顔で2本のペニスをシコシコしている。
美沙が片方のおちんちんに顔を寄せ、口を開いたところで画面が変わった。
『……♡』
顔の前で手皿のポーズでカメラに向かって微笑む美沙。
そこにはたっぷりと白い液体が貯まっていて、美沙はゆっくりとそれを飲み干していき、飲み終わると、にこりとピースをした。
『……っ……っ』
画面が切り替わる。
美沙は四つん這いになっていて、後ろから背の低い罪マスクに抱きしめられていた。
後方で体が大きい方の罪マスクがペニスバンドをしごいている。
「え、これ入ってる？」
「よく見て。ちゃんとパンツ履いてるでしょ？」
「いや……それでもアウトでしょこれは……」
雌顔の美沙は背の低い方の罪マスクに胸を乱暴に揉まれながら、激しく腰を振られている。
『……♡　……♡』
2人が動きを止め、ビクッ、ビクッと震える。

画面はそこで暗くなっていき、動画が終わった。
最期まで画面の端で自分をしごいている罪マスクが印象的だった。
「……これは美沙が優勝かな？」
と桜子。
「ていうか美沙。あれ彼氏でしょ？　あんなんでいいの？」
「いやぁ。意外と彼も乗り気で……続編を撮影中なのよ」
「ま、まぁ。２人が幸せならそれで？」
「う、うん」
カップルの関係は人それぞれなんだなー、と桜子と釘宮は実感するのだった。

魔法少女？（源しずな　パイズリ、セックス）

「また愛衣お姉ちゃんに会いたいなぁ」
ほのかはあの時のことを思い出し、電車の中で寝ることにした。
・
・
・
「……はっ……あれ？」
目が覚めたのはどこかの温泉だった。
ほのかはタオル１枚。
「あ……目が覚めた？」
「……（ぽかーん）」
その女性はしずな先生によく似ているが、見れば見る程他人の空似のような気がしてくる。
例えば髪は白いし、目が前髪で隠れている。
他に目を引いたのは乳輪しか隠れていない小さな水着に包まれた丸い大きな乳房と、頭から生えた動物の耳だった。
胸を見ていると、女性は下から支えて、ゆさゆさと揺らして見せた。
「くすくす♪　おっぱい好き？」
「……（こくん）」
「素直でよろしい……はい。好きなだけ触っていいわよ」
しずな（？）が水着を上にずらした。
ぶるん、と今まで見た誰よりも大きな乳房がまろび出る。
「……はぷ……ちゅる、ちゅる……ちゅっちゅっ……ちゅうちゅうちゅう……」
「くすくす。まるで大きな赤ちゃんでちゅねー。よちよち、よちよち」
「……♪」
乳首を吸いながら、両方のおっぱいをモミモミ。
しずな（？）はそんなほのかを優しく撫でてやる。
……ムクムク。
「あら♡　……えっちな赤ちゃんでしゅねー」

「……ちゅ……ちゅうちゅう」
「はずかちがらなくて良いんでちゅよ？　元気な証拠でちゅからねー」
　しずな（？）は微笑みながら竿を握り、上下にしごく。
「しこしこ。しーこしこぉ……お姉さんの手で、いーっぱいびゅーびゅーしましょうねー」
「ちゅぱちゅぱ……ちゅうちゅう……」
「うふふ……よちよち♪　いーこいーこ……お姉さんのおっぱいおいちいでちゅかー……あっ♡」
　赤ちゃん扱いは悪い気はしなかったが、恥ずかしいものがあった。
　ほのかは照れ隠しにビキニの脇から指を滑り込ませ、割れ目を愛撫した。
「もう……いたずらするエッチな子にはおしおきですよー」
　しずな（？）はほのかの腰を持ち上げ、おちんちんをその大きな乳房で挟んだ。
　胸の谷間から、かろうじて亀頭が顔を覗かせている。
　ボディソープを胸に垂らし、泡立てるとリズミカルに弾ませ始めた。
　ちゅっぷ、ちゅっぷ、ぱちゅんっ、ぱちゅんっ。
　もちもちとした感触のおっぱいがぽよん、ぽよんと跳ねる。
「ぎゅうー♪」
「あっ」
　おっぱいが押しつぶされるほど真ん中に寄せて、
「わしゃわしゃわしゃー♪」
「ふあああっ」
　高速でパイズリをする。
　ぱちゅっ、ぱちゅっ、ぱちゅんぱちゅんっ、ぱちゅっ、ぱちゅ、ぱちゅんぱちゅんっ。
「……はっくしゅん」
「あ、あら？　寒かったかしら？　お風呂に入って温まりましょっか」
　パイズリが中断されたのは少し残念だが、素直に手を引かれてシャ

ワーで泡を流される。
「うふふ」
「あ……」
しずな（？）は悪戯っぽく微笑むと、ちんちんを念入りに洗ってくれた。
ほのかは胸に手を伸ばし、洗われている間おっぱいの感触を堪能する。
「私も洗い流しちゃうから、ちょっと待っててね」
しずな（？）が自分の身体にシャワーを当てると、魅惑的な乳房やくびれた腰を伝って泡が洗い流されていく。
「……」
「え？　どうしたの？」
ほのかはしずな（？）のお尻を持ち上げようとした。
何をしたいのかよく分からないが、しずな（？）は腰を上げてやる。
シャワーに備え付けられた鏡に、中腰になってお尻を突き出すしずな（？）の姿が映し出された。
ほのかは水着をずらして、ゆっくり挿入していく。
「あっ♡　こら♡　……もう……しかたないわね♡　……あんっ♡」
お尻を突き上げると、鏡の中のしずな（？）の胸も大きく揺れる。
ぱんっ、ぱんっ。
「あんっ、あんっ」
ゆっさ、ゆっさ。
ぐいぐいぐい。
「あ、やっ、深いぃ……♡」
ぶるん、ぶるん。
ほのかは大きく揺れるおっぱいに目を奪われながら、心行くまで後ろから突き続けた。
「ああっ、で、でちゃう……」
「あっ、あん♡　こ、こらー♡　お尻に押し付けてグリグリしちゃダ
「どぷー！」……もう～♡」
びゅーっ、びゅー！

大きなお尻に腰を力いっぱい押し付けながらの射精。
しずな（？）は本気で怒っているわけではなく、腰を若干落としてほのかが射精しやすいようにしてやる。
ぴゅっ、ぴゅ……ぴゅる、ぴゅっ……ぬぽん。
「あぁ……」
出せるだけ全部、膣内で射精し、ゆっくり引き抜く。
ほのかのペニスが引き抜かれると、割れ目からドロリと白い雫があふれ出て、床に白い水たまりを作っていった。
「もう……また洗わなきゃいけないわね」
「あっ♪」
「くすくす。いつになったらお風呂に入れるのかしらねー♡」
しずな（？）はボディソープをおっぱいに垂らし、ほのかのおちんちんを洗い始める。
当分お風呂はお預けかな、とほのかは思った。